

-大学院歯学独立研究科-
第 87 回 中 間 発 表 会 プ ロ グ ラ ム

大学院学生等が、これまでの研究成果を発表します。
どなたでも聴講できますので、多数の参加をお待ちしております (聴講申込不要)

場 所 : 実習館 2 階 総合歯科医学研究所セミナー室

日 時 : 2017 年 9 月 27 日 (水) 17 時 25 分 開会 (中間発表 1 名)

2017 年 9 月 27 日 (水) 17 時 25 分 開会

No.	発表区分・予定時間	演題名・発表者	審査委員
	17:25	開会挨拶 高橋研究科長	
1	[中間発表] 17:30~18:00 司会: 富田教授	「高齢者における口腔内環境因子と残存指数との関連」 内川 竜太郎 3 年 健康増進口腔科学講座 口腔健康政策学	主査: 小笠原 教授 副査: 羽 鳥 教授 荒 講師

発表内容の要旨(課程博士)
Abstract of Presented Research (For the Doctoral Course)

学籍番号 Student ID No. (ふりがな)	ID#G 1502	入学年 Entrance Year	2015 年 Year	3 年
氏名 Name in Full	うちかわ りゅうたろう 内川 竜太郎			
専攻分野 Major Field	健康増進口腔科学講座 口腔健康政策学			
主指導教員 Chief Academic Advisor	富田 美穂子			
発表会区分 Type of Meeting	中間発表会 ・ 大学院研究科発表会 ・ 松本歯科大学学会 Midterm Meeting / Graduate school research meeting presentation / The Matsumoto Dental University Society			
演題名 / Title of Presentation				
高齢者における口腔内環境因子と残存歯数との関連				
発表要旨 / Abstract				
<p>【目的】 超高齢社会を向えた日本では、8020 運動が推進され歯の重要性が高まっている中で、いかに歯を齶蝕や歯周病に罹患させずに健全に保つ事が大きな課題となる。そこで、抜歯の対象となる齶蝕や歯周病に対する関連因子と口腔内の環境を調べ、高齢者における残存歯数に影響を与える因子を明らかにする事を目的にした。</p> <p>【方法】 65 歳以上の高齢者 33 名 (男:女=18 名 : 15 名) を対象に口腔内診査を実施し、残存歯数、DMF 歯数、プラーク・コントロール・レコード (PCR)、刺激時唾液量 (ml/5min)、唾液緩衝能 (4 段階評価)、口腔内細菌数 (S. mutans 菌・lactobacillus 菌) を測定した。 そして、歯周疾患の評価の為にプロービングデプス (PD) 歯周検査時出血率 (BOP)、全体の咬合状態を把握するために、咬合接触面積と咬合力を測定した。 これらの結果を残存歯数①20 歯以上有する群 (26 名、平均年齢 74.3 歳) と②20 歯未満有する群 (7 名、平均年齢 70.6 歳) に分け、唾液量、緩衝能、細菌数、BOP、PCR の項目で 2 群間の比較検討を行った。さらに、残存歯数、DMF 歯数、唾液量、緩衝能、細菌数、BOP、咬合接触面積、咬合力の相関を調べた。</p> <p>【結果】 残存歯数別の 2 群間比較では、S. mutans 菌数に有意差を認めた (Mann-Whitney 検定: $P < 0.05$)。唾液量、緩衝能、lactobacillus 菌数、PCR、BOP では 2 群間に有意差を認めなかった。 また、残存歯数は唾液緩衝能と DMF 歯数に負の相関 (相関係数: 緩衝能 -0.529、DMF 歯数 -0.631) を認めた。他の要因とは相関関係は認められなかった。 BOP は咬合接触面積と咬合力の間に負の相関を認めた (相関係数: 接触面積 -0.442、咬合力 -0.429)。</p> <p>【結論および考察】 残存歯数別の比較では、S. mutans 菌数のみ有意差を示したことから、65 歳までに 20 歯以上残すには、S. mutans 菌数の影響が強いことが推測された。 口腔内環境因子の相互関係では、残存歯数と唾液緩衝能の間に相関があることから、唾液量ではなく唾液の性状が関与する事が示唆された。さらに、残存指数と DMF 歯数との間に相関がみられることから、歯を残すには齶蝕に罹患しないようにする事が大切だと考えられる。 咬合力や咬合接触面積は残存歯数より、歯肉の炎症に影響されることが示唆された。</p>				